

1830年3月 帰国途中のシーボルトが其扇^{そのぎ}に送った手紙

石山 禎一
宮崎 克則

はじめに

国外追放となったシーボルトが其扇へ送った最初の手紙は、これまで未発表だった。シーボルトの手紙は、1941年刊の『シーボルト関係書翰集』⁽¹⁾に多く載っているが、この手紙は掲載されていない。

『シーボルト関係書翰集』は、ベルリンにあった日本研究所(日本学会)が収集したシーボルト関係資料をもとにしており、それは、1927年にシーボルトの孫娘エアハルト男爵夫人エーリカからベルリン日本研究所が一括購入したものである⁽²⁾(ベルリン日本研究所の収集資料は、1935年、上野の東京国立博物館で開かれた「シーボルト資料展覧会」(4月20日～29日)のために日本へ貸し出された。その時、2年間をかけて資料撮影が行われ、白黒反転のフォトシュタット版複製品は東洋文庫に現存する⁽³⁾)。ここで紹介する手紙は、シーボルトの次女マチルデ・フォン・ブランデンシュタインの子孫家⁽⁴⁾に伝わる手紙である。ブランデンシュタイン(Brandenstein)城に残るシーボルト手紙の一部は、宮坂正英氏らによって紹介され、日本語訳も付されているが⁽⁵⁾、この手紙は未発表である。

1829年、国外追放となったシーボルトは長崎を出港し、オランダによるアジア貿易の基地があったインドネシアのバタヴィア(現ジャカルタ)に着く。彼はバタヴィアからオランダへ向けて出港するとき、其扇へ3通の手紙を送った。オランダ語で書かれたシーボルト自筆の手紙の他に、内容を和訳し「女房詞」調の「くずし字」で書かれた和訳文の手紙も残る。シーボルトが送った3通の手紙は、その年の其扇の返事に「三月四日、同七日、同十四日、三度御手紙相とゝき」とあるから、確かに届いている⁽⁶⁾。

本稿ではオランダ語原文、「女房詞」調の和文を全文掲載し、併せて現代語訳も掲載する。手紙には、どのようなシーボルトの想いが込められているのだろうか。また彼は、日本に残した妻子の「面倒」をどのように見たのだろうか。

1. シーボルトと其扇

1823(文政6)年8月に来日した27歳のシーボルトは、ほどなく其扇(16歳)を出島へ呼び入れる。同年11月15日付、彼がドイツの母と伯父へ宛てた手紙によると⁽⁷⁾、

私は遂に望みを果たし、8月12日にナンガサキの港に着きました。…(中略)…愛すべき16歳の日本の乙女の腕に抱かれて。というのも選択よろしきを得て彼女を得るという幸運に恵まれた私は、今やひとりのアジア美人を所有しているのです。彼女をヨーロッパ美人と取り替える気などとても起きそうにありません。また、そもそも私の待遇もすばらしいもので、わが食卓は毎日第一級です。

とあり、彼の満足が伝わる。この「アジア美人」が其扇(そのぎ、楠本たき：1807～69年)であり、寄合町の遊女であった。長崎の丸山遊郭は、江戸の吉原遊郭、京都の島原遊郭、大坂の新地遊郭に並び称される遊郭であり、丸山町と寄合町を合わせた範囲であった。其扇は寄合町の引田屋抱えであり、1827(文政10)年の記録には「寄合町引田屋卯太郎抱遊女 其扇」とある⁽⁸⁾。古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編⁽⁹⁾によると、其扇はもともと熊本藩主細川氏に仕える侍女

であったとするなど、いくつかの伝承があるという。古賀氏が1923(大正12)年に其扇の孫娘(山脇タカ子、当時72歳)から聞き取りしたメモ書きによると⁽¹⁰⁾、

○シーボルトハ楠本ノ宅デ、祖母タキヲ見染メマシタノデス、祖母タキハ何デモ茶ヲクンデ持ツテ参ツタサウデス、シーボルトハ祖母タキヲ是非ニト懇望シタノデスガ、其頃ハ素人ノ女ハ出島ニ入ルコトカ出来マセンノデ、引田屋ニ相談シマシテ、遊女ノ名其扇ヲ名乗ツテ、表向ハ引田屋ノ遊女ト云フコトニ取計フテ貫ヒマシテ出島ニ入り、而シテシーボルトニ身ヲマカセタト云フコトデス

とある。これによると、出島に出入りできた日本人女性は遊女のみであったから、「タキ」(其扇)は引田屋の遊女として出島に入ったことになる。このような遊女を「名付遊女」という⁽¹¹⁾。遊女屋に手数料を払って、名義だけ遊女屋に籍を置くのである。また次の聞き取りもある。

○唐人ト紅毛人シーボルトト兩人カラ見染メラレマシタサウデス、唐人ハ何デモ浜ノ町ノ服部サンノ口入レデシタ、結局クジ引ニシテ、トウトウシーボルトニ身ヲマカセルコトニナツタサウデス

シーボルトと「唐人」がくじ引きをして、結局シーボルトが引き当てたとある。シーボルトが母らへ送った手紙にある「選択よろしきを得て彼女を得るという幸運」とは、このくじ引きを指すのだろうか。

其扇が出島に出入りするようになって4年後、2人の間に「いね」(1827~1903年)が生まれる。「いね」の誕生日は文政10(1827)年5月6日。このことは、寄合町の町役人である乙名の記録にある⁽¹²⁾。

乍恐口上書

寄合町引田屋卯太郎抱遊女

其扇

亥式拾壹歳

右之者、去ル未年方外科阿蘭陀人ひいとる・ひり

つふ・ふらんす・はん・しいほると呼入候処、懐妊仕候ニ付御届申上置候処、銅座跡親於佐平方ニ、昨夜女子出産仕候段、抱主卯太郎申出候ニ付、此段以書付御届申上候、以上

亥五月七日 乙名 芦刈
御

「阿蘭陀人」との間の妊娠・出産は届け出が必要だったから、寄合町乙名の芦刈高之進が「御」役所に届けている。他所の遊郭と違い、長崎の丸山遊郭では実家(佐平)で出産できたことも分かる。「外科」とは外科の意味である。

その後、3人は出島で暮らした。「いね」が生まれて1年3ヶ月後、1828年9月17日(文政11年8月9日)夜半から北部九州を台風が襲う。「シーボルト台風」である⁽¹³⁾。この台風で出島のシーボルトの部屋は壊れたが、その前に避難したことが唐人番の日記にある⁽¹⁴⁾。それによると、

(文政11年)八月九日夜、大風津波地下近国迄大破、出島部屋之破損十五番蔵、砂糖百五拾籠、カピタン部屋姿鏡、其外流出、外科紅毛人シイボルト・遊女・禿一同表門江逃来、当番御届申上候処、追々検使出、御勘定御普請役・町年寄組々追々馳付(後略)

とあり、シーボルトと其扇、彼女の世話をする禿^{かむろ}が出島の表門に避難してきている。「いね」も抱かれて一緒に避難したと思われる。さらに、彼らの姿はシーボルトの専属絵師というべき川原慶賀の落款がある『蘭館之図』にある⁽¹⁵⁾。これは出島の様子10場面を描き、卷子仕立てとなっている。第1場面が〔図1〕である。出島の屋上からオランダ船の入港を待ちわびる人々を描く。シーボルトはいつも緑の帽子を被っていたというから、白い服を着た人物はシーボルト。望遠鏡で入港するオランダ船を見ているのは商館長だろう。そして其扇が「いね」を抱き、その横にいるのは子守役のオルソン(Orson)。オルソンはインドネシアのセレベス島(現スラウェシ島)出身の若者⁽¹⁶⁾。



〔図1〕『蘭館之図』（長崎歴史文化博物館蔵）

シーボルトの個人的な使用人であり、彼の帰国とともにオランダへ連れていかれた。階段を駆け上がってきているのは、乳母と考える。その根拠は唐人番の日記にある⁽¹⁷⁾。

（文政10年7月）同九日、出島江入居候遊女其扇、出生之女子、乳少ニ付乳持之遊女呼入候儀、通事内談、無例儀故伺候様答、町年寄年番江申上被聞置候旨申出、依之聞置、遊女之振ニ而出入為致候事

「いね」が生まれて2ヶ月後、其扇はあまりお乳がでなかったので、乳母を出島へ出入りさせることについて、オランダ通詞（「通事」）や町年寄が協議し、「遊女之振」にして出入りさせるという記事である。名義的にどこかの遊女屋に所属する「名付遊女」として乳母を出入りさせているのである。川原慶賀は、お腹をすかせた「いね」が泣き出し、急いでやってくる乳母を描いたのだろう。最後に、古賀十二郎氏の聞き取りメモをあげる⁽¹⁸⁾。

○母イネハ出島テ生レマシタ、乳母カ二人遊女ノ名義デ出島ニ入りマシタ、別ニ黒坊ガ一人、オイネノモリヲシマシタ、或日黒坊ガ母イネヲヒトリ石ノ上ニ置テ、自分ハ海中ニ泳イテイタサウデス、蘭館ノ人達ハ俄ニ母イネノ姿ガ見エマセンノデ、出島中ヲアチラコチラト、サガシ廻リマシタガ、コノ始末ナノデ、皆アイタロガフサガリマセンデシタサウデス

「いね」が生まれたのは出島でなく、実家であったが、その後は出島で育った。乳母と子守役の「黒坊」（オルソン）がいたことを、「いね」の娘である山脇タカ子が語っている。オルソンによる子守りの逸話を見ると、あまり真面目でなかったようであるが、1830年12月付、其扇がシーボルトへ出した手紙には、3歳の「いね」がいつも「オルソンはどこ？」と尋ねるとあるから⁽¹⁹⁾、それなりに「いね」の面倒を見ていたのだろう。

2. シーボルトの出港と手紙の日付

1828(文政11)年の秋、シーボルトは帰国の予定であった。この年の9月、猛烈な台風が北部九州を襲う。台風の襲来は事実であり、北部九州の諸藩には多くの被害記録が残っている。この「シーボルト台風」によって、彼が乗る予定であったハウトマン号が座礁し、積荷から日本地図などが見つかり、「シーボルト事件」が発覚したと語られてきた。しかし、オランダ船の座礁と日本地図の没収は、もともと別々の事件であったが、当時から2つの事件は結びつけて語られてきた⁽²⁰⁾。シーボルトは、長崎奉行による取り調べに対し、一貫して協力者の名をあげることを拒んだが、結局、門人やオランダ通詞などが処罰され、シーボルトは国外追放となり、1829(文政12)年12月に日本を離れる。

1829年12月31日付、シーボルトが母と伯父へ送った手紙が残っている⁽²¹⁾。その手紙をシーボルトは船上で書き、さらに追記も書いている。それには、

最も親愛なるお二方へ

日本において発生した私にとって大変恐ろしい事件がとても好都合な結果をたどった結果、私は昨夜出島を出てファン・デア・ズアエーブ船長のジャワ号に乗船いたしました。当地で私費をもって収集した私のコレクションはすべて積み込むことができました。このコレクションの総価格は今なお20000グルデン以上に達します。…(中略)…[追記]私は1月23日無事にバタヴィアに到着いたしました。当地では調査研究に皆がとても好意的です。遅くとも6週間後にはヨーロッパに戻り、多分月俸375グルデンの身とるでしょう。

とある。この手紙によって、1829年12月30日に乗船したことが分かる。和暦では文政12年12月5日。シーボルトが乗ったジャワ号は翌年の1830年1月3日(文政12年12月9日)まで風待ちのために、長崎港の港外にある小瀬戸に停泊した。その間にシーボルトは小舟でこっそり上陸し、其扇と「いね」、門人らに最

後の別れを告げたという⁽²²⁾。バタヴィア着は1830年1月23日とある。しかし、別のシーボルト自筆メモには、1月28日のバタヴィア着とあり、再検討の必要がある⁽²³⁾。ともかく1ヶ月もかからずにバタヴィアに着いた後、シーボルトはオランダ領東インド植民地総督に「シーボルト事件」の顛末などを報告し⁽²⁴⁾、1830年3月5日にバタヴィアからオランダへ向けて出航する。

その前日の3月4日、シーボルトは其扇へ宛てた最初の手紙を書いた。そして、風待ちをしていた間に2通の手紙(3月7日、3月14日)も書いた。これら3通の手紙は、1830年夏、バタヴィアから長崎へやってくるオランダ船でもたらされ、其扇に渡された。

バタヴィア出航後のことについて、シーボルトの手紙を見ておこう。1830年7月7日、オランダの南部にあるフリッシンゲン(Vlissingen)港に着いたシーボルトは、同日付で母と伯父に手紙を書いた⁽²⁵⁾。それに、

かなり長くて、私にはつらい旅でしたが、遂にコレクションともども無事にオランダに到着いたしました。ジャワ号に乗ってバタヴィアの碇泊地を出発したのは3月5日だったのですが、風向きが悪くてスダ海峡に約17日も留まり、その後もしばしば無風状態によって喜望峰への航海は足止めを喰らったのです。

とあり、彼はジャワ島とスマトラ島の間にあるスダ海峡で、17日間ほど風待ちをしていた。現在、風待ちの間に書いた3月7日付手紙は所在不明だが、3月14日付の手紙がブランデンシュタイン城に残っている。手紙には封印も残っており、控えでなく原文である。シーボルトが其扇へ出した手紙が、なぜドイツの子孫家に伝わっているのか、不思議である。解決案は「おわりに」で示す。

3. バタヴィアの代理人と其扇たちの生活費

すでに紹介した1829年12月31日付、日本を離れる

シーボルトが船上で書いた母らへの手紙に⁽²⁶⁾、次の箇所がある。

私が旅の途中で死亡したり、事故に会ったりした時のために、バタヴィアの私の全権委任者であるテン・ブリンク＝レイnst商会に私はそんな場合には彼らの保管下にある全額を私の母に支払うよう依頼しておきました。

もしも途中で死んだら、財産が母の許に届くように手配したというのだから、テン・ブリンク＝レイnst商会はシーボルトの「全権委任者」であった。松井洋子氏の研究⁽²⁷⁾によると、テン・ブリンク＝レイnst商会は、ロッテルダムのワインハーベン(Wijnhaven)の事務所で働いていたテン・ブリンク(Candictus ten Brink)が、1821年秋にバタヴィア在住のレイnst(Samuel Rijnst)とともに設立した会社であり、シーボルトの給与や個人貿易を管理した。他のオランダ商館員たちもそれぞれにこのような代理人を抱えていたという。

商館長メイラン(Meijlan)が設立し、シーボルトらも参加した個人貿易協会(1826~1830年)はテン・ブリンク＝レイnst商会と契約しており、個人で稼ぐことのできる貿易の輸出入品、その価格、出資者が明らかになっている⁽²⁸⁾。この協会が活動した3年間、シーボルトは計9148グルデンの配当を受けており、その他にオランダ東インド政庁から支給される毎年の年俸4440グルデン⁽²⁹⁾もこの代理人が管理した。ただし、日本滞在中にどれほどの「稼ぎ」があったのか、全体像は不明である。シーボルトが、バタヴィアに到着した後の最初の手紙で、其扇・「いね」の生活費(1000テール=2000グルデン)を送ることを書いたのは、バタヴィアに着かなければ、自らの私産総額をはっきり把握することができなかつたからだろう。

シーボルトは3月4日付のオランダ語手紙で「een duizend Teil」(1000テール)、3月14日付手紙でも「een duizend Teil」の送付を書いている。「テール」(Teil・Tail)とは、そのような貨幣があつたのではなく、日本とオランダの貿易取引のための架空の換算

単位である。シーボルトが自費出版した『NIPPON』のなかに、金1両=6テール=12グルデンと明記されている⁽³⁰⁾。したがって、1000テールを金に換算すると約167両。日本銀行のホームページを参考に、金1両=10万円と仮定すると、約1670万円をシーボルトは2人の生活費として送ったことになる。

手紙の中で、彼は「これを運用して、利息で暮らせ」(3月4日付)とか、「無駄遣いしないように」(3月14日付)など書いており、指示は細かい。この生活費は確かに其扇へ届いており、同じ年の1830年12月25日(天保1年11月11日)付、其扇がシーボルトへ送った手紙に「銀十メ(貫)目もたしかにうけとり申候」とある⁽³¹⁾。金1両=6テール=銀60目(匁)で換算しており、1000テール=銀10貫目となる。

この後、1831年11月27日(天保2年10月24日)付、其扇→シーボルト宛の手紙には⁽³²⁾、

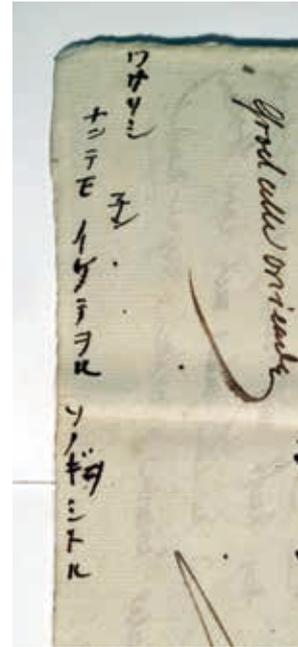
一、ぎんのことも、びるげるさまの御せわニ而おぢ方よりとりかへし、又ひゆるけるさまより五貫目おくり下され、二口メ十五貫目こんふらへあづけまいらせ候、毎月百五拾匁ツ、こんふらより利ぎんうけとり申候

とある。ビュルガー(「びるげる」)の世話で同居していた叔父から資金を取り返すことができたこと、銀5貫目追加のこと、計銀15貫目を「こんふら」(出島へ日用品を供給する商人仲間、「買物使」諸色売込人)と呼ばれるコンブラドール)に預けて、利息150目(匁、約25万円)を毎月受け取っていることが分かる。シーボルトの指示通り、其扇は資金を運用して、年利12%の利息⁽³³⁾を受け取って暮らしているのである。

*ビュルガー(Heirich Burger:1806-1858年)は、ドイツ生まれの薬剤師。1825年、シーボルトが要請した助手として、オランダ生まれの画家フィレネーフエ(Carl Hubert de Villeneuve:1800-1874年)とともに来日。



〔図2〕ブランデンシュタイン城(2018年撮影)



〔図3〕3月4日付手紙 カタカナ文

4. 手紙の書式—オランダ語手紙と和文手紙—

①オランダ語の手紙

ドイツのヘッセン州、シュルヒテルン(Schluchtern)市郊外にあるエルム(Elm)村の丘にブランデンシュタイン城がある。ここの当主であるコンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン氏は、シーボルトが1845年に結婚したヘレーネとの間にもうけた5人の子供のうち、次女マチルデ・フォン・ブランデンシュタインの子孫である。今日も城の一角を改装して博物館を設け、シーボルト家の顕彰を続けている〔図2〕。

ブランデンシュタイン城にあるシーボルト自筆の3月4日付手紙は、洋紙を縦に二つ折りにし、4頁にわたってインクで書かれており(画像は後掲)、最後には自筆のカタカナ文がある。ただし、少し意味不明である。

ワタクシ 子(ね)ン
ナンテモ イケテヲル ソノギヲシトル

元気になっていること、其扇への愛情を示しているのだろうか。バタヴィアにおいて、彼のカタカナを訂正してくれる人物はいなかったから、これが彼の「実力」であろう。この後、シーボルトは中国人の郭

成章を雇いオランダへ連れていくから、その後を送るカタカナ手紙は、もっと意味が通じるようになる。

次に送った3月7日付手紙は所在不明だが、最後の3月14日付手紙は現存する。それは、1枚の洋紙を折って封しており、封印も残る。その印文は、現在、オランダのライデンにあるシーボルトハウス(帰国後、1832年からライデンのラーペンプルフ19番地に住む。2005年から一般公開中)に展示されているシーボルトが持ち帰った印鑑とは、印文が少し違っている。手紙に残る折り目に沿って折ると、封をすることができる。包紙を用いることなく、1枚の紙に宛名・本文を書き、封までするやり方は、当時の大名などの手紙に用いられる切封と同じ方式である。



〔図4〕和文の手紙(ブランデンシュタイン城蔵)

②和文の手紙

〔図4〕に明らかなように、和紙に書かれた手紙は3通あり、端裏書に「一」「二」「三」の番号がある。シーボルトが出した3通の手紙を順番に訳している。3通とも和紙に筆であり、紙質は特別なものでなく、当時の庶民の手紙に使用される一般的な和紙である。

1830年3月、シーボルトがバタヴィアから送った3通の手紙は、その年の夏にはオランダ船で長崎へもたらされ、其扇へ渡された。其扇はオランダ語で書かれた手紙を理解することはできないから、オランダ通詞かシーボルト門人に翻訳してもらって内容を理解した。忘れないように、シーボルト手紙の内容を書き留めたのが、この3通の手紙である。後掲する現代語訳と、オランダ語手紙の翻訳を比べると、贈り物の品名は省略されているが、その他の内容はかなり正確に訳されていることが分かる。

ただし、言葉遣いに特徴がある。「女房詞」を用いているのだが、使い方に誤りがある。

- ①かならずわもしの事を御わすれなく
- ②わもしにもおもひやり、こゝろかいたみ申候

①は「必ずわもしの事を御忘れなく」というのだから、「わもし」=「わもじ(我文字)」は自称。自分(シーボルト)のことを忘れないように、と言っている。②は「わもしにも思いやり、心が痛み申候」だから、「わもじ」は対称の其扇を意味する。古語辞典によると⁽³⁴⁾、「わもじ」は通常、対称の「そなた」を意味するが、自称「わたくし」を意味する場合もあり、手紙の中では両方の意味で混用されている。さらに、

わもしたとひしぬるときハ、こもしもちしものハ、いち〜のこさす、かたみとして、ふたりへおくりやりまいらせ候

とあり、内容は自分(シーボルト)が死んだときは、持っている財産を形見として其扇・「いね」の2人に送る、というものである。したがって、「わもし」は

自称であり、シーボルトを指す。次の「こもしもちしもの」は、自分が持っている財産となるから、本来であれば、自称の「こゝもじ(此処文字)」と書かねばならないが、おどり字はなく「こもし」と書き間違っている。

3通の和文手紙を書いた人物は、無筆の其扇からシーボルト手紙の内容を聞かされ、代筆したと考えられる。ただし、あまり「女房詞」の使い方に慣れていなかった。筆跡は3通ともに一致しており、其扇の近くにいた文字の書ける女性の手になると思われる。

其扇が1830年12月に出した手紙を見ると⁽³⁵⁾、この3通の和文手紙の筆跡とは異なっており、彼女は近くにいた文字の書ける別の人物に代筆を依頼したことを示している。

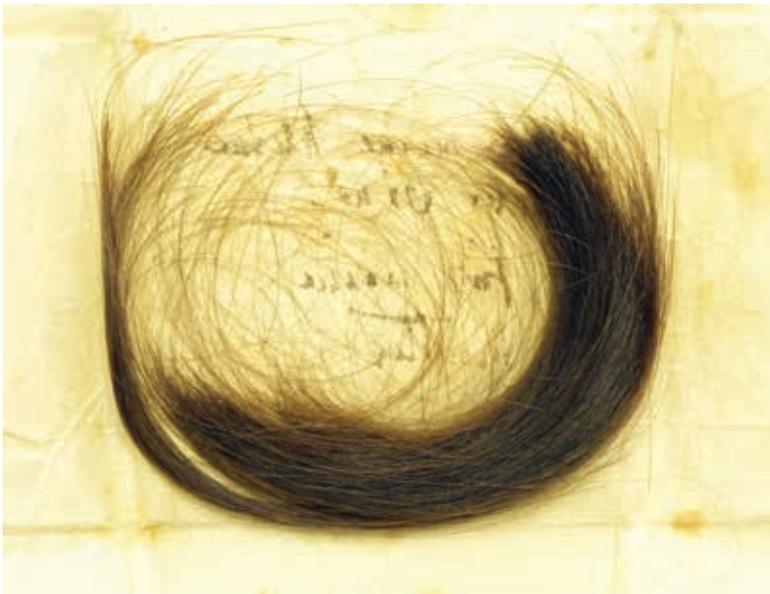
おわりに

手紙の画像などは後掲するので、シーボルトから其扇へ出した手紙が、なぜドイツのシーボルト子孫家に伝わっているのかについて示そう。

筆者の宮崎は2018年4～9月、在外研究でライデン大学(オランダ)に在籍した。その際、同大学大学院生(アーフケ・ファン=エーヴァイクさん)から、大学図書館が所蔵するホフマン資料(Johann Joseph Hofman:1805



〔図5〕其扇と「いね」を描いた煙草入れの蓋(シーボルト記念館蔵)



〔図6〕「いね」の髪(シーボルト記念館蔵)

～1878年、1830年にオランダに着いたシーボルトの助手となり、後にライデン大学日本学科の初代教授となる)のなかに其扇の手紙があることを教えてもらった。その手紙は1830年12月25日(天保1年11月11日)付、其扇がシーボルトへ送った最初の手紙であり、未発表の手紙であった。成果はアーフケさんの名前で『鳴滝紀要』29号に掲載している⁽³⁶⁾。

手紙には、煙草入れの送付、銀10貫目の受け取りが記されていた。其扇は2個の煙草(鼻煙草=嗅ぎ煙草)入れを贈っており、1つには「いね」、もう1つには「いね」と其扇が青貝細工で描かれた。青貝細工の作り方は、アワビの貝殻を薄く切り、文様の形に切り抜いて漆器に貼り付け、さらに漆を塗って研ぎだす。

「いね」だけを描いた煙草入れは、シーボルトの母へのプレゼントであったが、シーボルトは他のコレクションとともにオランダ政府へ売却しており、現在はライデン国立民族学博物館にある(一部破損)。もう1つの煙草入れはシーボルトへのプレゼントであり、直径は10cmほど、蓋の表に其扇、蓋の裏に「いね」を描いている。これは、約30年後(1859～62年)に再来日したシーボルトが其扇に返し、其扇の子孫である楠本家から長崎市へ寄贈され、今は長崎のシーボルト記念館に国指定の重要文化財として保管されている〔図5〕。

シーボルトによる煙草入れの返却について、山脇

タカ子の証言がある。古賀氏が大正12年に聞き取りした時、山脇タカ子は72歳だったから、シーボルト再来日時は10歳ほどである。それによると⁽³⁷⁾、

○シーボルト再渡来ノ際、出島ノ甲比丹部屋デ、祖母タキ、母イネ、私三人ハ会见イタシマシタ、ソノ際シーボルトハ、アノ毛髪、其他ノ品々ヲ、祖母ヤ私達ニミセマシタ、「如何ナ日モ〜」決シテオ前達ノコトハ忘レタコトハナイト申シマシタ、ソレデ、祖母タキモ、母イネモ、私モミナ胸一杯ニナリマシテ泣キマシタ

とある。30年ぶりに来日した「還暦」過ぎのシーボルトは、出島で50歳を越えた其扇(「タキ」)ら3人に会い、「毛髪」や「其他ノ品々」を返し、いつも大事にしていたことを語った。このことを聞いて其扇たちは皆泣いたという。シーボルトが返した毛髪とは「いね」の髪の毛であり、これも楠本家から長崎市に寄贈され、シーボルト記念館に保存されている。紙包みのなかには〔図6〕のように、切ったばかりのような「いね」の髪の毛が入っている。紙包みの上書きにはシーボルト直筆で「von meine kleine Oine fur meine Mutter」(私の可愛い「おいね」からお母さんへ)とあり、シーボルトが日本を離れるとき母のために持ち帰ったものである。彼はふたたびこれを日本に持参し、其扇たちに返した。その心境は、30年間の想いを「言葉」だけでなく、「モノ」でも示したのであろう。このとき、シーボルトが返した「其他ノ品々」の一つに、其扇と「いね」が描かれた煙草入れがあった。

其扇もまた30年間の想いを「モノ」で示し、返却した。それが、シーボルトが其扇へ送った手紙であり、内容を理解できるように和訳した手紙であった。だから、シーボルトが出した手紙の現物と和訳文が、ドイツのシーボルト子孫家に伝わっていると考える。

〔注〕

- (1) 日独文化協会編『シーボルト関係書翰集』、郁文堂書店、1941年
- (2) 大井剛『東洋文庫蔵旧ベルリン日本学会シーボルト文献複製の存在様態』(『東洋文庫書報』41号、2010年)。ベルリンの日本研究所へ返却されたシーボルト関係資料は、第2次大戦後にアメリカとソ連に接収され、アメリカから返還された資料がドイツのボフム(Bochum)大学にある。戦前に撮影された東洋文庫のフォトシュタット版複製には、この変遷過程で紛失した資料も残っている
- (3) 日独文化協会・日本医学史学会・東京科学博物館主催『シーボルト資料展覧会出品目録』、1935年
- (4) 宮坂正英『古城に眠るシーボルト文書』(ヨーゼフ・クライナー編『黄昏のトクガワ・ジャパン』NHKブックス、1998年)
- (5) 宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸『フォン・ブランデンシュタイン家蔵、1822年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳(1)』(『鳴滝紀要』11号、2001年)～宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸『ブランデンシュタイン家所蔵シーボルト関係書簡の翻刻・翻訳によって得られた新知見について』(『鳴滝紀要』22号、2012年)
- (6) (オランダ)ライデン(Leiden)大学図書館蔵『ホフマン資料』No:BPL2186。アーフケ・ファン＝エーヴァイク「1830年12月、帰国したシーボルトへ其扇が送った最初の手紙」(『鳴滝紀要』29号、2019年)
- (7) 宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸『フォン・ブランデンシュタイン家蔵、1823年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳(3)』(『鳴滝紀要』15号、2005年)
- (8) 文政10年『亥年諸事書上控帳 寄合町』(『渡辺文庫』14-29、長崎歴史文化博物館蔵)
- (9) 古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編482頁、長崎文献社、1969年
- (10) 『施福多関係史料』(『古賀文庫』13-111、長崎歴史文化博物館蔵)
- (11) 古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編1頁
- (12) 文政10年『亥年諸事書上控帳 寄合町』
- (13) 小西達男「1828年シーボルト台風(子年の大風)と高潮」(『天気』6月号、2010年)。ドイツのボフム大学図書館には、シーボルトの個人的なメモや手紙、門人が提出したオランダ語論文が所蔵されている。その中に『Meteorologische Beobachtungen vom 23 September 1827-ultimo Sept. 1828』(No.1.142.002)の小冊子がある。これは1827年9月23日から1828年9月末までの出島における気象観測データの記録である。1828年9月17日(和暦8月9日)には、次の特記がある。
- Am Abende Sturm aus SO gegen 12 Uhr Organ nach 12 Uhr der Barometer 28.4
- 訳すと、「夜に南東の風の嵐、12時ごろ台風、12時過ぎの気圧28.4」となる。つまり17日の夜に南東の風の嵐がはじまり、夜中にかけて猛烈な暴風雨に一変した、という当日の様子が読み取れる。12時過ぎの気圧は28.4(インチ)とあり、この値は他の日時の値と比べると極端に低く、台風がかなりの規模であったことがわかる。
- (14) (17)元禄2(1689)年に完成した唐人屋敷の門番として設置された地役人の唐人番は、後に出島の出入りも管理するようになる。享和1～天保12年『倉田氏日記』(『松木文庫』316、九州大学記録資料館九州文化史資料部門)
- (15) 長崎歴史文化博物館蔵
- (16) シーボルトが自費出版した『NIPPON』図版の56図に、オルソンの肖像画があり、図版説明では「オルソン セレベスの若いブギース人」とある(シーボルト『日本』図録第1巻、雄松堂書店、1978年)
- (17) 『施福多関係史料』(『古賀文庫』13-111、長崎歴史文化博物館蔵)
- (18) アーフケ・ファン＝エーヴァイク「1830年12月、帰国したシーボルトへ其扇が送った最初の手紙」(『鳴滝紀要』29号、2019年)
- (20) 海老原温子・宮崎克則「創られた『シーボルト事件』-「台風」・「座礁」・「禁制品発覚」の結びつき-」(西南学院大学『国際文化論集』26-1号、2013年)
- (21) 宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸『フォン・ブランデンシュタイン家蔵、1827年、1828年、1829年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳』(『鳴滝紀要』19号、2009年)
- (22) 古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編549頁
- (23) 石山禎一『シーボルト-日本の植物に賭けた生涯』165～169頁(里文選書、2000年)によると、シーボルトの日記風自筆メモ「日本からパタヴィアへの帰還」には、「一月二十八日、パタヴィアの港口に到着」と明記されている。呉秀三『シーボルト先生-其生涯及び功業』357頁(吐鳳堂、大正15年、東洋文庫の『シーボルト先生-その生涯及び功業』1～3巻<平凡社、1967～68年>は資料編を除いた本文編のみの復刻)以来、古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』後編564頁、石山禎一・宮崎克則『シーボルト年表』61頁(八坂書房、2014年)など、1月28日のパタヴィア着としてきたが、シーボルトの手紙では1月23日となっており、再精査の必要がある。
- (24) 1830年2月25日のオランダ領東インド植民地総督決議録抜粋によると、シーボルトの報告に基づき、彼が王立博物館のために集めたコレクションをオランダへ送り、成果を印刷・公開すること、月400グルデンの俸給をシーボルトに払うことが決定している(栗原福也『シーボルトの日本報告』306頁、東洋文庫784、平凡社、2009年)
- (25) 宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸『フォン・ブランデンシュタイン家蔵、1825年、1828年、1830年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳(補遺2)』(『鳴滝紀要』21号、2009年)
- (26) 宮坂正英、ベルント・ノイマン、石川光庸『フォン・ブランデンシュタイン家蔵、1827年、1828年、1829年シーボルト関係書簡の翻刻並びに翻訳』(『鳴滝紀要』19号、2009年)
- (27) 松井洋子「シーボルトの勘定帳：出島における経済活動を探る」(国立歴史民俗博物館編『シーボルトが紹介したかった日本』、2015年)
- (28) 永積洋子「オランダ商館の脇荷貿易について」(『日本歴史』379号、1979年)
- (29) 1823・1825～1829年『sraktementstaten』(ハーグ国立文書館、日本商館文書群、No.1507～1512)によると、日本着任時の1823年におけるシーボルトの給与は2530グルデン。1825から29年は年俸4440グルデンに固定していた。なお、29年における商館長メイランは46759グルデン、助手のビュルガーは3000グルデンだった
- (30) 宮崎克則「シーボルト『NIPPON』の書誌学研究」130頁(花乱社、2017年)
- (31) (35) シーボルト宛の其扇手紙は、ライデン大学図書館蔵『ホフマン資料』No:BPL2186にある。ブランデンシュタイン城に残るシーボルト宛のビュルガー(Burger)手紙(No.B17.Fab.278)、1830年12月31日付によると、12月30日にフィレネーフエ(Villeneuve)と一緒に1000テールを手渡した、とある。また、ドイツのボフム大学図書館のシーボルトコレクションに残るシーボルト宛のオランダ通詞荒木豊吉の手紙(No.1.448.000)、「21 december 1830」付によると、「デ・フィレネーフエ様から私の父が現金1000テールを受け取り、其扇に渡しましたからご安心ください」とあるから、1000テール＝銀10貫目(約1670万円)の現金は、ビュルガー・フィレネーフエ→荒木豊吉の父(オランダ通詞、荒木八之進)→其扇の順序で渡されたことになる。この時点で、其扇に「大金」が渡ったのであるが、後に其扇の叔父との間でいろいろな問題が起こり、シーボルトによる資金の追加もある(野藤妙・海老原温子・リザ エライン ハメケ・宮崎克則「1831年、ビュルガーがシーボルトに出した書簡」、『九州大学総合研究博物館研究報告』11号、2013年)。
- (32) 東洋文庫蔵、フォトシュタット版複製、日独文化協会編『シーボルト関係書翰集』63頁
- (33) イサベル・田中・ファンダーレン「阿蘭陀通詞稲部市五郎について」、およびイサベル・田中・ファンダーレン、藤本健太郎「稲部市

五郎関連史跡・史料・文献一覧」(長崎市長崎学研究所紀要『長崎学』3号、2019年)によると、小通詞末席の稲部市五郎はシーボルトの個人貿易に関与し、「いね」の養育費の手配にも関与していた(結局、シーボルト事件により、その金額などは市五郎の子供に寄付されることになる)。1828(文政11)年、稲部市五郎→シーボルト宛の借用証書を翻訳すると、

フォン・シーボルト博士へ

シーボルトより200テールの現金を受け取りました。その利子は100テールあたり、12テールとなり、1828年12月から実施します。

1828

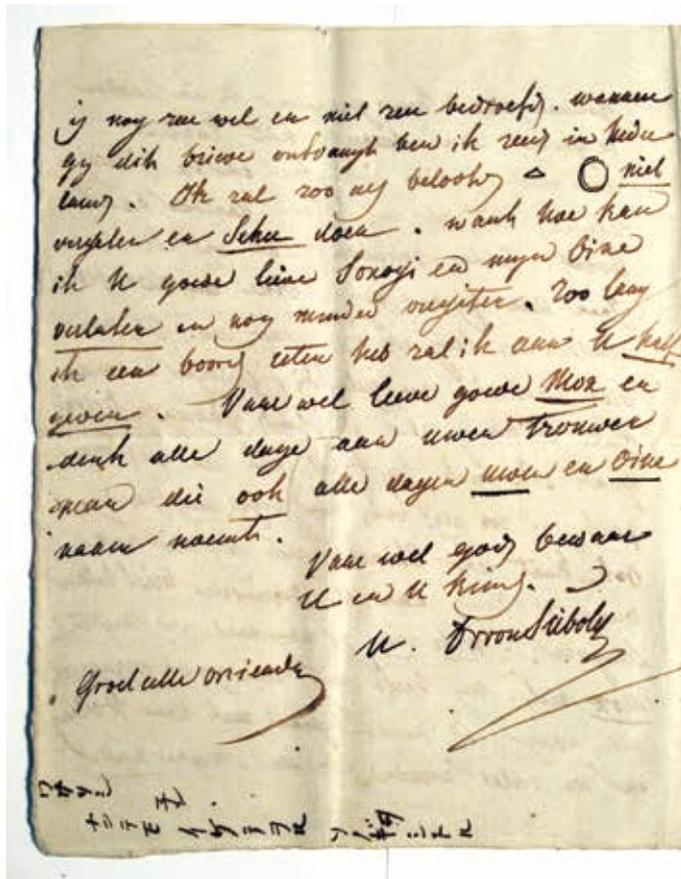
市五郎

となる。ここでも年利12%であり、其扇が運用した利率と同じであり、当時の長崎の相場だったのだろう。

(34)『角川古語大辞典』(角川書店、1999年)、『日本国語大辞典 第二版』(小学館、2001年)

(36)アーフケ・ファン＝エーヴァイク「1830年12月、帰国したシーボルトへ其扇が送った最初の手紙」(『鳴滝紀要』29号、2019年)

(37)『施福多関係史料』(『古賀文庫』13-111、長崎歴史文化博物館蔵)



②〔翻刻 オランダ語手紙〕

(1 頁目)

Batavia den 4 er Maart 1830

Lieve goede Sonogi en Oine

Gelukkig ben ik te Batavia aangekomen, nadat ik aan boord zeer zwaar ziek ben geweest, doch thans weder zeer gezond en vertrek morgen vroeg vier uur naar nederland met Kapitein van der Zweep. Ik hoop dat gij wel, te vreden en gelukkig leeven(leven) mogt en nooit mij vergeten die zich ieder dag met een vaderlijk hart en dranend(tranend) oog nog aan mjne lieve Sonogi en goede Oine._ Zoo(Zo) lieve als Oine heb ik op heel Java geen kind gevonden, dit maakt mij veel en groot hart pijn. Echter zal ik alloos(alles) goed voor gij en Oine zorgen en wanneer ik mogt sterven als dan kregt Oine en gij een vierte(vierde)

(2 頁目)

van al wal(wat) ik heb. Dit jaar zend ik U en Oine

Een stuk witte katoen

〃 〃 blouw (blauw) en rood katoen

Drie stuk (niet heele) Tafachelas(Tafalkleed)

drie stuk (niet heele) fijne Sits

Eenen kam en een Haarsiersel van karet

Een rood Haarsiersel

10 ringetijes

7 vingerhoud

3 pakjes naaidraad

2 boschjes saffraan

1 krijstal schoteltje

Ik het begin en einde van ieder stuk Stof is met mijn Schap(Schip) zoo als monster geshapt. waar Schap op is behoord aan gij en Oine.

Dit is alles een klein present. aan Villeneve heb ik geschreven om aan gij en Oine van de

(3 頁目)

goederen aan hem gezonden U in handen te geven een duizend Teil Content. dat moet U zoo inrigten of op intrest leggen, dat U en Oine daarvan kan leven. Echter behalven dat zal ik ieder jaar aan gij en mijne Oine een mooi present zenden zoo lang als ik maar leev. Ik ben op Batavia zeer gelukkig geweest en onder goede schikking naar Nederland gekomen. Orson gaat ook met mij. Heeft hier zeer goed opgepast en zoo als baas van mijn huis geweest. ook komt een Chineesch met mij die zal van Holland aan U Japansch brief helpen schrijven. Wite yiu is nog wel en vergeet Mox niet. hij heeft mij zeer goed opgepascht. alle open en houden gaan met naar Holland. en zoo veel levende planten. Mij moeder

(4 頁目)

is nog zeer wel en niet zeer bedroefd. wanneer gij dit brieve ontvangt ben ik reeds in Neder-

land. Ik zal zoo als beloofd △○ niet
vergeten en Schre(schreien) doen. want hoe kan
ik U goede lieve Sonogi en mijn Oine
verlaten en nog minder vergeten. zoo lang
ik een boord eeten (eten) heb zal ik aan U half
geven. Vaar wel lieve goed Mox en
denk alle dage aan uwen trouwen
man die ook alle dagen uwer en Oine
naam noemt,

Vaar wel goed bewaar
U en U kind.

Groet alle vrienden.

U. Dr.von Siebold.

ワタクシ 子(ね)ン

ナンテモ イケテラル ソノギラシトル

*原文中の()は、現在のオランダ語を記載した。

(石山禎一 翻刻)

③〔翻訳 オランダ語手紙〕

1830年3月4日、バタヴィアにて

愛する優しい其扇と「おいね」へ

私は船中*^①で非常に重い病気*^②になりましたが、幸いにもバタヴィアに到着しました。今はとても元気で、明日(5日)早く4時にオランダへ船長ファン・デル・ツェープと一緒に出発します。私は愛する其扇と優しい「おいね」が平穏で幸せに暮らすことを望んでいます。私のことを忘れないでください。毎日、(2人のことを思うと)父親らしい心を持って今でも涙がこぼれるのです。本当に可愛い「おいね」のようなこどもはジャワ全体で見つかりませんが、「おいね」のことを思い出しひどく心が痛むのです。お前と「おいね」のことは、万事良きよう世話をいたします。私がもし死んだ時は、お前と「おいね」に私が持っているすべてのものの4分の1を送ります。今年、私はお前と「おいね」に(次の贈物を)送ります。

白の綿布1枚

青と赤の綿布1枚

卓布(不完全な)3枚

上等な更紗(不完全な)3枚

籠甲櫛1つと簪1つ

赤い簪1つ

指ぬき10個

指輪7個

針箱 3 個

サフランの束 2 つ

クリスタルガラスの皿 1 枚

私が船で送ったそれぞれの品には、最初と最後にお前と「おいね」宛に私の印が捺してあります。この贈物はほんのわずかですが、フィレネーフェから手に入ります。私は手紙でこの品がお前と「おいね」宛に送ること、彼(フィレネーフェ)からお前へ1000テール(銀10貫目)を渡すことを書きました。このお金を運用して、利息でお前と「おいね」は暮らしてください。私が無事であるうちは、毎年、私はお前と「おいね」にたくさんの贈物を送ります。私はバタビアではとても元気で、オルソンはここではわが家の主*^③によく仕えたので、オランダへ連れて行きます。また中国人 1 人を一緒に連れて行きます。これはオランダからお前宛てに日本語の手紙を書かせるためです。ウイッテヒウは今も元気で、お前のことを忘れずにいます。私が非常によく世話した沢山の生きた植物は、すべて開けた(そのままの)状態でオランダへ持って行きます。私の母は今もとても元気で、あまり心配もして(衰えても)いません。この手紙がお前に届くころには、私はオランダに到着しています。私が(お前と)約束したように、△○のこと*^④が忘れられず、(思い出すと)涙の乾く暇がありません。どうして私は愛するお前や「おいね」のことを、片時も忘れることができようか。私が一膳の食事をするときは、お前に半膳を供えます。

日々、お前の誠実な人柄を思いながら、毎日、お前と「おいね」の名を呼んでいます。お前とこどもが元気に暮らし、(弟子たちや)友人たちの皆さんへよろしくお伝えください。さようなら。

お前のドクトル・フォン・シーボルト

ワタクシ 子(ね)ン

ナンテモ イケテラル ソノギラシトル

*①ジャワ号

*②日本語では「あひわつらひ」(相思：病氣)と訳されているが、原文では「非常に重い病氣」となっている。通詞は、其扇の心情を気遣い「非常に重い病氣」と訳さず、ただ単に「病氣」と訳したのであろうか。

*③シーボルト

*④シーボルト事件のこと

(石山禎一 翻訳)

④〔画像 和文手紙〕



(中略)



⑤〔翻刻 和文手紙〕

〔端裏書〕

ひとふてもふしまいらせ候
 さ候へハ、このほふニもせんちう
 にてハあひわつらひ候へとも
 まつふじじやかたたらへ
 つきもふし候、このよし
 御よろこひ下さるへく候
 しかし、とふじハいたつて
 たつしや二候まし、この五日ニハ
 またく本國へ
 かびたんはんでるどのと
 まいり申へく候、とかく
 おふたりのぶじ、そくさひにて
 おんくらしをいのりまいらせ候
 かならずわもしの事を
 御わすれなく、まひ日
 おふたりをおもわぬ日とてハ
 これなく、まことにく
 おいねほどかわひものハ
 これなく、それゆへ
 わもしニもおもひやり
 こ、ろかいたみ申候、ふたりの
 事ハばんしよきよふニ
 せわいたし、ふじゆうニ
 これなきよふ、かならずく
 いたしつかわしまいらせ候
 わもしたとひしぬる
 とさハ、こもしもちし
 ものハいちく／＼のこさす
 かたみとして、ふたりへ
 おくりやりまいらせ候、さてまた
 このせつのふねニおくり
 つかわし候しなニハ、わもしの
 いんきやうをしるしニ
 つかわし申、このおくり
 ものハ、いさ、かの事にて

〔漢字当てはめ文〕

一筆申しまいらせ候
 左候へば、この方にも船中
 にては相しい候えども
 まず無事ジャカタラへ
 着き申し候、この由
 御喜び下さるべく候
 しかし、当時は至つて
 達者に候まし、この五日には
 またく本國へ
 カピタンハンテル(ハン・デル・ツェープ)殿と
 参り申すべく候、とかく
 お二人の無事、息災にて
 御暮らしを祈りまいらせ候
 必ずわもじ(我文字 シーボルト)の事を
 御忘れなく、毎日
 お二人を思わぬ日とては
 これなく、誠にく
 おいねほど可愛いものは
 これなく、それゆえ
 わもじ(其扇)にも思いやり
 心が痛み申し候、二人の
 事は万事良きように
 世話いたし、不自由に
 これ無なきよう、必ずく
 いたし遣わしまいらせ候
 わもじ(シーボルト)例え死ぬる
 時は、こ、もじ(此処文字 シーボルト)持ちし
 物はいちく／＼残さず
 形見として、二人へ
 送り遣りまいらせ候、さてまた
 この節の船に送り
 遣わし候品には、わもじ(シーボルト)の
 印形を印に
 遣わし申す、この贈り
 物は、いささかの事にて

このしなハひれねへどの方
 おんて二入りもうふすへく候
 また／＼ほか二銀十メ目
 ふたりへつかわし申候
 これもひれねへどの方
 あひわたし申候、此かね
 にておふたりふじゆう
 なきよふ、おんくらし
 なさるへく候、わもし
 ぶしにてありしうちハ
 とし／＼よきおくり
 ものおくりつかわし
 候まし、さよおほしめし
 なさるへく候、おりそも
 いまハしよふもなおり
 ほんごくへつれこし
 申候、またとふじんひとり
 めしつれもふし
 ほんごくより兩人ニ
 日本ふみをか、せん
 ためのたよりニなり申候
 うひてひうも、すいふん
 ふじにて御さ候、これも
 おまへの事をあんしくらし
 申候、は、二もぶしにて
 あまりおとろへもいたし
 不申候、此文のおまへニ
 と、くじふんハ、わもしハ
 ほんごくへもはや
 つき申候、おまへと
 やくそくいたし候とふり
 △○の事ハ、おもひいだし
 なみたのひまなく候
 どふしてかわひふたりの
 事をかたときもわすれ
 られへぞ
 わしか一せんめしを
 たへるあひだハ、おまへニ
 はんぜんハあたへ可申候
 ずひぶんおふたりとも

この品はヒレネヘ(ライレネーフエ)殿より
 御手に入り申すべく候
 また／＼ほかに銀十貫目
 二人へ遣わし申し候
 これもヒレネヘ殿より
 相渡し申し候、この金
 にてお二人不自由
 無きよう、御暮らし
 なさるべく候、わもし(シーボルト)
 無事にて在りしうちハ
 年々良き贈り
 物送り遣わし
 候まし、左様思し召し
 なさるべく候、オリソン(オルソン)も
 今ハしよう(瘡カ)も治り
 本国へ連れ越し
 申し候、また唐人一人
 召し連れ申し
 本国より兩人に
 日本文を書かせん
 ための頼りになり申し候
 ウヒテヒウ(ウイッテヒウ)も、ずいぶん
 無事にて御座候、これも
 お前の事を案じ暮らし
 申し候、母にも無事にて
 あまり衰えもいたし
 申さず候、この文のお前に
 届く時分は、わもし(シーボルト)は
 本国へもはや
 着き申し候、お前と
 約束いたし候通り
 △○の事は、思い出し
 涙の暇なく候
 どうして可愛い二人の
 事を片時も忘れ
 られえぞ
 わしが一膳飯を
 食べる間は、お前に
 半膳は与え申すべく候
 随分お二人とも

そくさひニくらし
 日々とわもしの事を
 おもひがし、すへなから
 でしじう、ほうゆう
 ともへよろしく、おん
 つたへ下されまし
 おんたのみまいらせ候

千八百三十年三月四日

シイホルト方

シヤカタラ方

其 扇殿
 おいね殿
 参ル

息災に暮らし
 日々とわもし(シーボルト)の事を
 思いがし、末ながら
 弟子中、朋友
 共へよろしく、御
 伝え下されまし
 御頼みまいらせ候

千八百三十年三月四日

シイホルトより

シヤカタラより

其 扇殿
 おいね殿
 参る

(宮崎克則 翻刻)

⑥〔現代語訳 和文手紙〕

一筆申し上げます。

私はバタヴィアへ行く船で病気になったけれど、まずは無事に着きました。このことを喜んで下さい。今はとても元気です。5日にはオランダへ「かびたんはんてる」(ファン・テル・ツェープ)さんと一緒に帰る予定です。とにかく2人の無事・息災を祈っています。必ず私のことを忘れないで下さい。毎日、2人のことを思わぬ日はありません。

本当に「おいね」ほどかわいいものは無く、それ故にお前のことを思い出し、心が痛みます。2人のことは、万事良きように世話し、不自由無いようにします。私がもし死んだ時は、私が持っているものは、すべて残さずに形見として2人へ送ります。

さて、今回の船で送った品には、私の印を捺して送っています。この贈り物はほんのわずかですが、フィレネーフエさんから手に入ります。他に銀10貫目を2人へ渡します。これもフィレネーフエさんが渡します。この金で不自由の無いように暮らして下さい。私が無事でいるうちは、毎年良い贈り物を送ります。そのように思っています。

オルソンは、今は「しよふ」(癩カ)も治り、オランダへ連れて行きます。また唐人1人も一緒に連れて行きます。これはオランダから2人に日本語の手紙を書かせるためです。「うひてひう」(ウイッテヒウ)もとても元気になっています。彼もお前のことを心配しています。母も無事で、あまり衰えもしていません。

この手紙がお前に届くころには、私はオランダに到着しています。お前と約束したように、△○の事を思い出すと、涙の乾く暇がありません。どうしてかわいい2人のことを、片時も忘れることができようか。私が一膳の飯を食べるときは、お前に半膳を供えます。

2人とも元気に暮らし、毎日私のことを思い出して下さい。末筆ながら、弟子たち、朋友の皆さんへよろしくお伝え下さい。お頼みいたします。

1830年3月4日

シーボルトより

ジャカタラより

其 扇殿

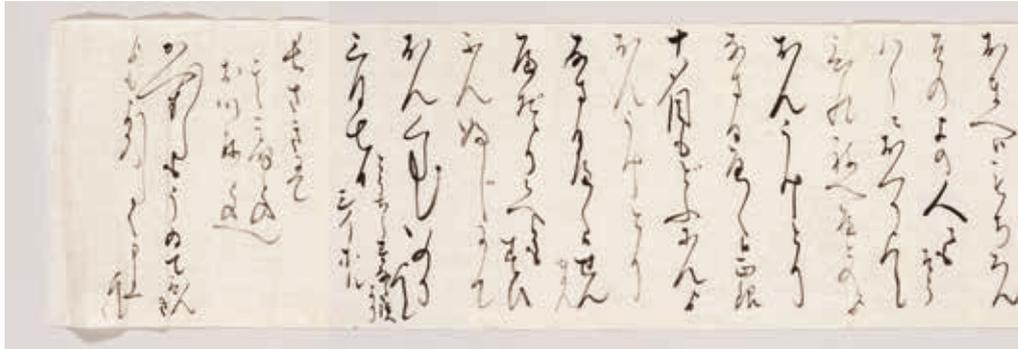
おいね殿

参る

(宮崎克則 訳)

〔2〕1830年3月7日付 手紙

①〔画像 和文手紙〕 (オランダ語手紙は現存しないので、和文手紙のみ掲載)



②〔翻刻 和文手紙〕

(端裏書)
一一一

このたび、びんせん二
とちうにてゆきやい
申候ゆへ、さしたる事も
これなく候へとも、あまり
なつかしきゆへ、また
ひとふてしめしまいらせ候
此文した、め候ゆへ
なをおもひいたし、かきり
なき事を、御すいもし
下さるへく候、かよふ二
あひじやうかきり
なけれハ、ふたりニ
あしき事ハせぬ事と
おほしめし下されへく候
このたよりニおんちの
ほうゆうたちへ
てかみあけたく
候へとも、まことに
いそかしく候ゆへ
またのたよりと
さしひかへまいらせ候
しかしおくりものハ
おまへハもちろん
そのよの人ニもそう
はうニおくりまいらせ候
ひねねへとの方
おんうけとり
なさるへく候、正銀
十メ目もどふにん
おんうけとり
なさるへく候、せんまん
へだ、り候へとも、すひ
ふん、ふじにて
おんくらし、いのりまいらせ候

(漢字当てはめ文)

この度、便船に
途中にて行き会い
申し候故、さしたる事も
これ無く候えども、あまり
懐かしき故、また
一筆しめしまいらせ候
この文したため候故
なおい出し、限り
無き事を、御すいもし(推文字 推測)
下さるべく候、かように
愛情限り
無ければ、二人に
悪しき事はせぬ事と
思し召し下されべく候
この便りに御地の
朋友たちへ
手紙あげたく
候えども、誠に
忙しく候故
またの便りと
差し控えまいらせ候
しかし贈り物は
お前はもちろん
その余の人にも双
方に送りまいらせ候
ヒレネへハ(ワイレネーフエ)殿より
御受け取り
なさるべく候、正銀
十貫目も同人より
御受け取り
なさるべく候、千万
隔たり候えども、随
分、無事にて
御暮らし祈りまいらせ候

とうちうすなた浜より
三月七日
シイホル
長さきにて
其 扇との
おいねとのへ
かへすくも、うゐてひんき
方もよろしく申上まいらせ候

道中すなた浜より
三月七日
シイホル
長崎にて
其 扇との
おいねとのへ
返すくも、ウイテヒンキ(ウイッテヒウ)
よりもよろしく申し上げまいらせ候

(宮崎克則
翻刻)

③〔現代語訳 和文手紙〕

今回、途中で便船に出会ったので、たいした事はないが、あまりに懐かしいので、手紙を書きました。手紙を書いたのでふたたび思い出しました。ご推察ください。2人への愛情は限りなく、決して悪いことはしません。そちらの朋友たちにも手紙を送りたいが、あまりに忙しいので、またの機会にします。しかし贈り物はお前はもちろん、双方に贈ります。フィレネーフェさんから受け取ってください。銀10貫目もフィレネーフェさんから受け取ってください。千万隔たっていますが、無事に暮らすことを祈っています。

道中のすなた浜より

シーボルト

3月7日

長崎にて

其 扇殿

おいね殿へ

返すくも、「うゐてひんき」(ウイッテヒウ)よりも宜しくとのこと。

(宮崎克則 訳)

②〔翻刻 オランダ語手紙〕

(封書 宛名)

Aan Sonogi en Oine Sahe
Nagasaki Japan

Straat Sunda den 14 ° Maar
wohl 1830*^①

Lieve goede Mox

Nog een Kleen(klein) briefs zend ik te reeds tien dagen
op de reis naar Holland zijnde, echter door
Slechten wind niet voor vooruit komende : mogte
deze laatste brief U en Oine in beste gezond-
heid vinden en zoo lange bewaren, tot dat ik
weder van Holland hun schrijven. Mijne moeder
en oom zijn nog zeer wel en zeer getroost voer
mijn ongeluk in Japan doorstaan.

Vaarwel goede Mox en lieve Oine
U. trouwe Dr. Von Siebold.

Orson gaat junij mede naar Holland.
Ik heb U en Oine veel prezentaen gezonden en de
Villeneuve zal u een duizend Teil in handen geven
ruts zeer op, dat u dit geld goed beward.—

(石山禎一 翻刻)

③〔翻訳 オランダ語手紙〕

(封書 宛名)

其扇と「おいね」宛のもの
長崎 日本

3月14日 スンダ海峡にて*^②

愛する優しい妻へ

オランダへの旅は風悪く(船が)進まないのです、10日ほど同地に逗留しています。少し短い手紙ですが、またまた送ります。ここでは最後の手紙になりますが、オランダから再び手紙を書きますので、お前や「おいね」も丈夫で長く用心するよう祈っています。私の母や叔父はとても元気で、私が日本で災難に遭いましたが*^③、(帰国することができて)ようやく安心しています。

優しい妻と可愛い「おいね」、さようなら
お前の誠実なドクトル・フォン・シーボルト

オルソンは6月にオランダへ連れて行きます*^④。私はお前と「おいね」にたくさんの贈物を送ります。そしてお前に1000テール差し上げますので、フィレネーフェより受け取ってください。お金は無駄に使うことが無いよう十分気をつけてください。

*^①wohl 1830(元来1830年：ドイツ語)は、後に誰かが加筆したものか。筆跡が異なる。

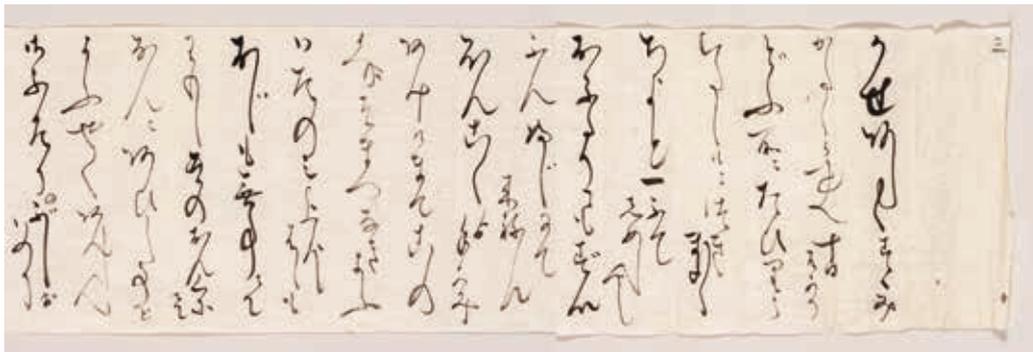
*^②インドネシアのスマトラ島とジャワ島の間にある海峡。

*^③シーボルト事件のこと。

*^④6月の予定が、7月7日オランダのフリッシンゲンに到着している。

(石山禎一 翻訳)

④〔画像 和文手紙〕



⑤〔翻刻 和文手紙〕

〔端裏書〕
「三」

かせあしく、すゝみ
かたく候ゆへ、十日ばかり
どふ所ニたひりう
いたし候ニつき、またく
ちよと一ふてしめしまいらせ候
おふたりニもずい
ふんふじにて、来ねん
ほんこくか手かみ
あけ候まで、この
文そまつなきよふ
御たのミ申上まいらせ候、はゝも
おじも無事にて
わもし、そのおんくににて
なんニあひし事を
よふやくあんしん
御ふたりのおしおいのり
まいらせ候

同所にて
三月十四日 シイホルト
御兩人へ

かへすゝも、おりそんほん
こくへつれ申候、御兩人へ
いろゝしんもつ
これあり申候、かねも
十メ目さしむけ候
ひれねへとのより
おんうけとりの事
尤むだニかねを
つかひ、これなきよふ
御よふしんなさるへく候

〔漢字当てはめ文〕

風悪しく、進み
難く候故、十日ばかり
同所に滞留
いたし候につき、またく
ちよつと一筆しめしまいらせ候
お二人にも随
分無事にて、来年
本国より手紙
あげ候まで、この
文粗末無きよう
御頼み申し上げまいらせ候、母も
伯父も無事にて
わもじ(シイホルト)、その御国にて
難に遭いし事を
ようやく安心
お二人の無事お祈り
まいらせ候

同所にて
三月十四日 シイホルト
御兩人へ

返すゝも、オリソン(オルソン)本
国へ連れ申し候、御兩人へ
色々進物
これあり申し候、金も
十貫目差しむけ候
ヒレネへ(ライレネーフエ)殿より
御受け取りの事
尤も無駄に金を
使い、これ無きよう
御用心なさるべく候

〔宮崎克則 翻刻〕

⑥〔現代語訳 和文手紙〕

風が悪く船が進まないので、10日ほど同じ所にいます。ちょっと一筆書きました。お2人とも無事で、来年はオランダから手紙を送るので、それまでこの手紙を大事にしてください。母も伯父も元気で、私が日本で難に遭いましたが、帰国することができて安心しています。お2人の無事を祈っています。

同所にて

3月14日 シーボルト

御兩人へ

返す〜も、「おりそん」(オルソン)はオランダへ連れていきます。お2人へいろいろな贈り物があります。お金も「ひれねへ」(フィレネーフェ)さんから受け取って下さい。もっとも無駄遣いはしないよう、気をつけて下さい。

(宮崎克則 訳)

石山 禎一(いしやま よしかず) 元東海大学 講師
宮崎 克則(みやざき かつのり) 国際文化学部教授・博物館長

